
2年B組健八先生VS涼宮ハルヒ

紘下右京

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

2年B組健八先生VS涼宮ハルヒ

【Nコード】

N8765H

【作者名】

紘下右京

【あらすじ】

長崎県佐世保市にある私立・佐世保実業高校（通称：佐実、実業）勤務で主人公で2・B担任の嶋田健八や、その生徒のキョンという少年の周りで起こるハルヒや実業の教員などのいろんな人物が繰り広げるドタバタを文章に表現した学園コメディ。

第一章：通勤拒否症の教師（前書き）

以前間違って消してしまった「通勤拒否症の教師」ほか？の改訂版扱いとします。

第一章：通勤拒否症の教師

ここは長崎県佐世保市の角川高校の2年B組。

今英語の授業である。

が、来ている先生がやかましくない限り、2 - Bは授業中で騒がしい。

長身でズンダレた印象の桜下誠志郎が軽く180cmを超える長身の堀外孝祐に

「オイね、佐世保市営球場で野球ばしたっさ…」

「桜下の話オチがないやん」

すると2 - Bに授業に来ていた豊嶋茜英語教師が、

「桜下くん、うるさいですよ。ちゃんと授業聞いときなさい」と言つとニヤリと笑いながら

「それとも背中に焼き印は入れられたかとかな？」ウッフ

桜下

「うわぁ先生Sやん…」

と顔を真っ青にしながら言う。

ちなみに豊嶋はメインヒロインで少し茶髪まじりの美女ある。

授業が終わった後豊嶋英語教師が職員室に戻ろうとしたとき、鉄橋弘靖という長身でメガネがり痩せてメガネかけた茶髪が豊嶋に喋りかける。

長門有希という紫髪でショートヘアの少女は無表情で読書に夢中だ。

―数分後、職員室―

豊嶋

「健八、何で四根来んと？」

とボサボサ頭で机のイスに腰をかけPSPの「BLEACH」の「ヒートザソウル6」をしている推定20代後半男性に話しかける。

彼は主人公で2・B担任で国語教師の嶋田健八。

「知らん。オイに訊くな。聞いた話によると、アイツ小学生ん時は活発で毎日学校行きよったらしかバイ」

と言う。四根光久とは同じく健八の中学・高校時代の同級生であり、どういう訳か健八・四根・豊嶋・高地・佳代子は同級生揃って角高で勤務しているのだ。

すると

「マジ!？」

話を聞いていたもう1人のメインヒロインで髪は首まで伸びてる程

度の若干ロングヘアーで養護教諭で健八の中学時代の同級生でもある高地果林が反応する。

と言っ。

「年々増えていきよるらしかバイ。不登校や引きこもり」

木山佳代子というサブヒロインで理科教師で同じく健八の中学時代の同級生でロングヘアーで大人っぽいスタイル抜群の美女が言う。

上記で説明し忘れたが高地もスタイルが良い美女なので、彼女目当てでわざと転んで保健室に行く生徒は少なくない。

あと佳代子もS女で、豊嶋と同じく授業態度が悪い生徒にたいして”全裸にしてイスにロープで縛り付けたるか”や”宙吊りにして木刀でボコしてやろうか”などと言う。

健八

「今から四根ば迎えに行つて来る」
と言っ。

末さんこと末林圭祐という容姿が年齢より老けて熊というあだ名がつく程がっしりした少年が自動車科（長崎県下唯一）の2-Cの教室を占拠している。

末さんが2-Cの教室全体を睨み付け、教卓の後ろの部分を蹴り、

「誰だ！？俺にどこ中と言ったのは」

2・Cの前には野次馬がいっぱい集まっている。その中には俺、内川愛という小柄でミニスカの少女、江田静という内川の友人で顔がふっくらした髪を2つ編みにした少女もいた。

末さんにどこ中と言ったのは長身で四角い顔の山野翔一郎という人物で、それを知った末さんは山野のところに行き、

「何や末林」

と言ってる山野の腕に末さんは肘落としをする。

「圭ちゃん！こっちおいで」

と、内川が言うと、野次馬に紛れていた黒髪黒目の美少女が末さんに近づいて行き、

「末林やめなさい」彼女の名前は涼宮ハルヒ。

「涼宮、助けてくれ」

と、山野。

ハルヒは必死で止めようとする。

するとそこに堤がやって来て、

「涼宮、後はこっちに任せろ。やめんか末林、来なさい」

と言って未さんを
ヘッドロックして連行して行った。

「ハルヒ、怪我してないか？」

と、俺。

「あれくらいで怪我しないわよ」

キョン「未さん危ないからキレたら」

「ビビり過ぎよキョン。あいつ何でどこ中って訊かれただけでキレるのかしら？」

と、ハルヒ。

「さあそいが解れば苦労せんばってん」

と、内川が割り込む。

＊＊

健八

「四根ゝ居るや？」

健八は四根の家の前まで来ていた。

玄関の扉が開き、顔がニキビだらけの男が

「何？」

と言いながら出てくる。

四根である。

健八

「お前何で学校来んとや？」

四根

「そいは…何か緊張してしまっつさね」

健八

「お前学生時代と全然変わっとらんやつか！どがんしたらあがり症の治るとか考えんばね」

四根

「ご苦労やな」

健八

「何ば呑気な事ばかり言いよつとや。お前の為ぞ」

四根

「…」

健八

「とにかく学校行くぞ」今から四根のあがり症は治す為に授業の練習ばする。お前数学教師やから、数学せろ」

健八は一番廊下寄りの机に腰をかけている。

四根

「じゃあ $(x + y)(a + b - c)$ を解いてみる」

健八

「∴ 現役卒業して10年も経ってるからもう忘れた。じゃ誰か先生の真似ばして」

四根

「は？先生の真似∴健、リクエストして」

健八

「体育の濱」

四根

「お前のごと簡単に部活ばサボりよったっちゃ、つまらんやっか」

と言いながらボールを投げるフリをする。

「今一迫力の無か。どけ、今度はオイにさせろ」

と言い座っていた机を立ち、教卓へと向かう。

健八

「社会の高田の真似。『お前一回死ね。そっから飛べ』『両岡顎かくな』『白ぼち早く』『両岡将人前期5点』『志佐はテレビ映っているのか？』まあこっいつたようにアイツの意外と名言多いけんね。ってまだ校長と教頭に挨拶に行つとらんやっか」

四根

「何ばしよつとや」

＊＊

堤にヘッドロックされ、職員室に連れて来られた末さん。

末さん

「あつ先生放してください。」

「は？」

と、堤。

末さん「あなたがC組の担任ですよね？」

山下

「おうそつだけど」

末さん

「C組の背が高くて四角頭でメガネかけたヤツが俺にイヤな事言ってきたんです」

山下

「背が高くて四角頭でメガネかけた…それ山野？そいつに何て言われたとネ？」

末さん

「どこ中って言うてきたんです」山下
「…」

末さん

「先生、そいつを殺して下さい。お願いします」

山下

「おいちよつと待て。何で俺が山野を殺さなきゃならんねん？」

すると偶然通りかかった健八が

「何ばしよつとネ？末さん」

末さん

「あ先生。C組の山野ってヤツが俺にどこ中と言って来るんです」

健八

「つまりお前は、いろんなヤツから同じ質問されて答えるのが面倒くさくなったのネ。だけんがって簡単にキレよつたつちやつまらん。みんなと仲良くせんば。てもう授業始まるけん教室に戻らんば」

末さん

「あ、はい」

と言い職員室を後にする。

四根は校長と教頭に挨拶をした後同じく数学教師で先輩にあたる新瀬の机に行き、

「先生、今日の5時間目の2Bと…の数学の授業は俺が行きます」

新瀬

「おうそつや。手間が省けてよかったわい」

健八

「（この調子でいけばよかけどねえ）」

と心中で呟く。

第二章：作者宅へ乗り込む

健八は休日、自宅のアパートでケータイの小説を読みながら

「…くだらん」

読んできるとあるケータイ小説がつまらないらしい。

健八が読んでいるのは

「肥前戦隊健太先生」という時代劇学園小説だったのだ。

「これの作者の松川内伸紘もさあ青川三郎が書いたやつとか灼眼のシャミのごもつとパワーがあるやつば書けんとかなあ」

頭をかきながらぼやく健八。

「作者の家に乗り込むぞ。何か知らんけど松川内ン家知ってるような…確か川棚の…」

数分後、健八は川棚町のとある民家の前で

「ここかぁ」ピンポーン

チャイムが鳴る。

「はい」

と言いながら俺は玄関に行き、扉を開ける。

健八・キヨン「お…お前は…」

俺たちは同時に言った。健八教師が俺目の前に居て、どういう訳か健八も俺を見て驚いていた。

キヨン「け…健八先生…何ですか？」

健八「松川内伸紘っていうペンネーム、どこから取ったとかは知らんばってんお前が書いた肥前戦隊健太先生っていう小説、あまりにもつまらんけんが、お前に正しい小説の書き方は教えに来た。てかこのやり取り、週刊少年ジャンプに載ってる某時代劇コメディ漫画と似とるかもしれんけどとにかくあがらせてもらうバイ」

「ああ…ちよつと…」俺が言ってる事を無視し、自宅に乗り込んで来た健八教師。

健八

「つーわけでえ表紙が漫画になってる小説もしくは小説化した漫画アニメの主人公のシルエツトば出して行くからそいが何なのか答える」

キヨン

「…おう」

一体何をしたいのかこの人は。

健八教師はカーテンを閉め切り、通常よりも大きい画用紙と布らしき物を持って来て

「じゃこの腰の辺りまである長い髪を持っているっていうのが特徴のこの可愛い女の子は？」

「『灼眼のシャミ』のシャミ」

「おおよくわかったな。じゃこの無駄にスタイルが良くて女みたいな男は何か？」

「…『ハヤトのごとく』の綾崎ハヤト」

「正解」

と言いながら健八は俺を指差す。

「てかさあ小説は文字だけだから、今の必要無くない？」

「…今のはただのウォーミングアップやっけん」

「言いよる事のめちゃくちゃですよ」

「まあとにかくだ。漫画では最初はコメディだったのが途中からバトル漫画になった例もよくあるけんね。小説でも同様の傾向が伺えられる。お前ドライブ好きらしいな。まさかキヨン、お前後から力ーレース漫画に路線ば変えようって考えてんじやなかや？」

「確かにそれも考えてますけど」

「まあ別よかけどさ。テレビ付けてよかや？」

「ん？よかばい」

健八教師はテレビの電源を入れる。

TVの音声

「”第一町人発見”」

「ピッ」

面白い番組がなかったので電源を切る。

健八

「そうだ。とある人物たちは紹介してやるけん、そいつらばモデルにしたやつば小説に出してみたらどうかな？つつつてもお前もよく知ってる連中バイ」

何だよとある人物って。

すると突然どこからかハルヒと長門と朝比奈さんと古泉が出て来る。

ハルヒ

「ええ、キヨンが肥前戦隊健太先生っていう小説を書いた松川内伸紘の正体」

古泉

「キヨンくんもやりますね」

まるで仏像のように固まって沈黙している長門を背景に朝比奈さんは恥ずかしそうしながら両手の人差し指をくっつけ合わせて周囲を見渡している。

「えーっと、ハルヒと、長門と朝比奈さんと古泉。コイツらば登場させたらどがんなるかな。面白そうだから書いてみよう」

＊＊

テレビで涼宮ハルヒの憂鬱があっている中、健八はケータイ小説『健太先生』を読んで

「…やっぱりくだらん」

と一喝。

第三章：元副担任を囲んでトークショー～あなたとは違うんです～

佐世保実業高校生徒・先生一同は歓迎遠足で長崎県佐世保市の弓張岳に来ていた。

そんな中、商業教師の佐藤之繁さとうゆきしげが2・Bの生徒数人に囲まれている。

佐藤はメガネかけて今社会問題になっているメタボであり、今の2Bの生徒が1年のときの副担任だった。

佐藤を囲んでいた一人で同じくメガネかけてて肥満体型の大元寺右耶が、

「あのですね先生、ビデオ屋が早岐にあるんですよ。オイも何回か行った事あるんですよ。ある日オイがそのビデオ屋の陳列棚は眺めていたら外国人が来たんですよ。そしたら何かその外国人が間違つてアダルトビデオコーナーに入ったらしくて”オーマイガー”っていう悲鳴が聞こえたんですよ。分かりますか？」

気分良さそうにベラベラ喋った大元寺のテンションを一気に下げするように佐藤は、

「…わからない」

と一蹴。

「…」

躊躇する大元寺。

今度は鉄橋が腕を組み、

「先生、テニス分かりますか？」

「わからない。」

無表情で即答する佐藤。

テニスの話では会話がかみ合わないのか。

「テニスのボールにもですね、野球ボール同様軟式と硬式があるんですよ」

と末遠が言つと鉄橋がそれに便乗してテニスのルールやらラケットはどのメーカーのやつが良いのかについて全力で語り始める。

するとそこにハルヒが佐藤にお菓子の差し入れに来た。

「佐藤先生、これあげる」

「うわぁありがとう×2 涼宮、お前気前いいな」

「当たり前のことしただけですよ」

ハルヒにこんな一面を見た俺は正直驚いたぜ。

佐藤と大元寺は両手の指を差し合い

「あなたとは違うんです」

何だよそれ。もしかして今のは福田元総理の名言だろ。

佐藤が来ていたＴシャツに「あなたとは違うんです」と言っている福田元総理が描かれていたのだ。

今度は豊嶋教師と高地教師と佳代子教師が佐藤にお菓子を差し入れに来る。

高地

「これ差し入れます」

佳代子

「私はこれあげます」

豊嶋

「私はこれ」

佐藤に飴やらビスケット類の一部の袋入りの菓子を次々と渡す。

佐藤

「ありがとう。オイこの調子やったら大元寺のごとなるな」

まるで大元寺を悪い見本のように言う。

メガネをかけ、体格は細身であどけない感じの進藤侑典が

「オイ逆に太りたいっちゃけど」

痩せすぎてる奴の口癖だ。

レギュラーキャラに等しい末さんこと末林圭祐が

「あの先生、俺ドラゴンボールにはまってるんですよ。俺、家に居るときに”かめはめ波”の真似をしてるんですよ」

佐藤

「オИАニメ見らんけんわかんないから」

「末林ドラゴンボール見よっど？あれ面白いよね。私単行本全巻持つとるバイ」

末林と同じくドラゴンボールオタクだと思われる佳代子教師が食い付いて来る。ドラゴンボールのキャラクターや技について全力で討論し始める。

*

佐藤

「なかなか大元寺のごとなるのは難しいなあ」

自分の腹を両手で触りながら言う。大元寺や末遠も両手で自分の腹をさわっている。

進藤が大元寺や佐藤の腹を触る。

そこに小坪瑠が

「先生ダイエットせんばですね。大元もやけど」

「佐藤先生ほんと大元と仲良いですね。俺先生や大元のテンションには付いて行けませんよ」

佐藤教師と大元寺の絶好調ぶりに感心しながら俺は言う。

「ああほんと瑠も桜下も…早岐中は調子良いな」

同様に優等生で谷口よりは圧倒的に真面目な国木田もあの2人のテンションにはついて行けない模様。当然だ。

健八教師はすぐそこにあつた自販機に行き、150円で売られている500mlのペットボトルのお茶を買い、元の場所に戻って来て飲む。

またまた佐藤と大元寺、次は末遠も加わり

「あなたとは違うんです」

と一発。

ハルヒ

「大元寺さんも佐藤先生も面白いわね。次の映画はこの2人を主役

にしちゃおうかな」

豊嶋

「涼宮さん、映画監督しよつと？」

ハルヒ

「そうよ。SOS団の企画の一つでね。今はネタがなかなか思い付かないけど」

高地

「ハルヒちゃん、目上の人には敬語は使わんば」

ハルヒ

「あ…はい（うざいわねこの女）」

佐藤

「ワハハハハ…」

と爆笑していると大元寺が

「先生またあれしましょうよ」

佳代子

「おい、大元寺と佐藤先生がまたあれしそっバイ」

豊嶋・高地・ハルヒ

「え？」

と言い振り返る。

佐藤・大元寺

「あなたとは違ふんです」

と両手の指を指し合いながら言う。

ハルヒ

「面白〜い。佐藤先生次は私も混ぜて」

豊嶋

「面白そうだから茜も」

高地

「茜がするって言うとなったら果林も」

佳代子

「じゃ茜と果林がするって言うとなったら佳代も」と言い、去る。

数分後、ハルヒは長門と朝比奈を連れて戻って来る。

佐藤

「……」

大元寺

「うわぁ」

佐藤が大元寺の腹を掴む。

大元寺も仕返しに佐藤の腹を摘もうとしたが、

「ああこそ〜（笑）」

見事にかわされてしまう。

長門

「…」

みくる

「…何やってんのこの2人」

末遠

「コイツらと居ると退屈しないな」

佐藤教師と大元寺と末遠は勿論、今度はハルヒ・豊嶋教師・高地教師・佳代子教師も加わり、両手の人差し指を差し合い一斉に

「あなたとは違っんです」

流石に大人数でこういった一発芸をするとかかなりの迫力だ。

一方で国木田・進藤・長門・朝比奈さんは

「…」

若干しらせ気味である。

健八

「佐藤先生、腹触っていいですか？」

佐藤

「別いいよ」許可してくれたので健八は佐藤の腹を触り、キヨンと国木田もそれに便乗して佐藤の腹を触る。

健八

「大元寺ほどじゃなかネ」

キヨン

「確かに」

佐藤教師が顔をしかめながらああいう事言つのも無理は無い。

「そういえば藁元も古泉も来てないな」

憲五郎の姿がない事に気づいた佐藤が言う。

健八

「ああ憲五郎はサボリらしいです。よね瑠」

と言うと、すぐそこで鉄橋とテニスボールでキャッチボールしていた小坪瑠が

瑠

「はい。アイツ今朝オイに”遠足だるかけん今日休む”ってメールして来たんですよ」

と返事したついでに今朝の出来事を喋り出す。

キヨンも佐藤に

「そういえば谷口もサボリです」

国木田も続いて

「サボりでーす。ったくあのズンダレと来たら…」

どうせ遠足が面倒くさかったからだろアイツ

そういえば古泉の姿も無い。

またサボリだ。

藁元憲五郎と古泉と谷口。前者2人は見た目はなかなかの二枚目だがいずれもサボリ癖がついてるのがたまにキズ。（キヨン視点はここまで）

上記のやり取りから約30分後

憲五郎& a m p・古泉は各自自宅でボーっとしながら、憲五郎・古

泉は凡東英二のMBS毎日放送・TBS系のお昼の冠番組

「ボンボンボン」、谷口は寺根誠司の讀賣テレビ・日本テレビのお昼の冠番組

「情報ライブテラネ屋」を見ていたのである。

第三章：元副担任を囲んでトークショー～あなたとは違うんです～（後書き）

本編で説明するのを忘れてましたが、古泉一樹は遠足をサボって（2Bには古泉のほかに藁元憲五郎「大元寺や末遠と仲が良い」も遠足をサボっていた）。それと豊嶋茜と高地果林はメインヒロインで「To Love」や「いちご100%」のキャラクターでは前者はララや東城綾、後者は西蓮寺春菜や西野つかさ的ポジションであり、木山佳代子は（メイン）ではないがヒロインに分類される、いわば金色のヤミや北大路さつきのポジションです。

第四章：横着過ぎるのが災いして襲撃を喰らう野球部のヤツら

どこかの破落戸共しろうこが何か話している。

「実業の野球部横着かよね」

「うん」

「じゃ行くか。お前ら、準備はよかや？」

「ああ。あの糞野郎共は思いっきり痛め付けられないとわからんバ
イ」

何を企んでんだ！？コイツら。

――佐世保実業野球グラウンド――

野球部のヤツらはいつも通り練習していた。

「へいピッチャービビってる」

「うつさかぞお前ら！もっと下がれ！」

「ん？何だアイツら」

と野球部員Aが指差す方向にはヤツらがいた。

「よお実業の野球部諸君。暑い中頑張ってるお前たちに差し入れば
持ってきたぞ」

「差し入れは何？」

「ちょっと来い」

と言い野球部員の一人はヤツらの方に行き、

少年 A

「差し入れは…これだ！！」と言い野球部員の一人はヤツらの方に行き、野球部員 A を釘バッドでボコボコにし、

さっきの A の仲間であるヤンキー B や C や他の数人たちは他の野球部員たちを次々と拳や釘バッドで殴ったり、蹴ったりする。

これにより野球グラウンドはまるで血の海となった。

監督

「何が起きたんだ。」

駆けつけた監督は一体何が起きたのかわからないでいた。

やられて倒れていた野球部員の殆どは後から各自自分で起き上がったが、

野球部員 B

「先生大変です。1人瀕死の重傷のヤツがいるんです」

監督

「何だと！？」

と言い野球部員 B と 2 人で瀕死で倒れている野球部員の所へ行く。

監督

「おい大丈夫か？」

野球部員B

「しっかりしろ」

「…」

監督

「どうやらこりゃ救急車ば呼ばんばかも」

と言いズボンのポケットの中に入れてたケータイを取り出し、119に繋げる。

「Ⅱもしもし火事ですか？救急ですか？」

監督

「救急お願いします。人が倒れてるんです。住所は母ヶ浦町…」

数分後、救急車が

「ピーポーピーポー」

とサイレンを鳴らしながら野球グラウンドに沿っている道に入ってくる。

救急隊員2、3人が担架を転がしながら救急車から降り、倒れてる野球部の少年の所へ行き、

「この子どうしたんですか？」

野球部員 A

「変なヤツらが来て、オイたちはボコボコにしたんです。オイたちは大丈夫だったんですけど、コイツはオイたち以上に相当やれてるみたいでこの通りぐったりしてるんです」

救急隊員 A

「君喋れますか？」

「…」

救急隊員 B

「どうやらこりゃヤバいな。一刻も早く病院に搬送せんば」

倒れている野球部の少年を担架に乗せ、暫くして救急車に搬入し、緊急車両にのみ許されてる赤色回転灯が回っている上から更にサイレンを鳴らしながら佐世保共済病院まで搬送して行く。

*

健八

「つーわけで大事件やつたらしいけんね」

「うわぁそいつら強っ」

と言ったのは身長は小柄でヘビー級の江口大誌である。彼は健八の同級生でラーメン屋を経営して、チューリップFCというサッカーチームのコーチもしている。

「角川高校の野球部のヤツらばボコボコにした連中は何者なのかつて言うのは知らんと?」

と訊いて来たのは長身でメガネを掛けた二瀬渉である。

彼は佐世保南高校で社会教師をして、野球部顧問をしている。

長崎県川棚町のの平島の漁協付近で夏祭りがあっており、その中で端っこ辺りの茂みで健八が角川高校の野球部襲撃事件のエピソードを長々と語っていたのだ。

するとそこにいずれも露出度が高い格好をした豊嶋と高地とバッタリ会い、豊嶋が健八の方向を指さし、

豊嶋

「あっアイツらどっかで見た事あるような…」

高地

「え?」

健八

「高地に豊嶋、何ばしよつとや?」

高地

「そいはこっちの台詞やっか」

若干怒鳴り口調で言い後にする。

* つづく *

第五章：噂をすれば影がさす（前書き）

エロチック（？）な表現が含まれています。ご注意ください。

第五章：噂をすれば影がさす

空に花火があがっている。

健八

「川棚の夏祭りの花火は今一迫力の無かね。」

大誌

「うん。いわれてみれば」

渉

「佐世保シーサイドフェスティバルの花火の方がよっぽど迫力あるやん」

すると、そこに阪尾サキというショートヘアで痩せ過ぎた印象の女と槇本笑美というこれといった特徴がない女が来る。

サキ

「健ちゃん、あんたば捜しよった奴の居ったバイ」

健八

「ん？お前らには情報の通達の遅れとるけん知らんかもしれんけどさつき会って来た」

サキ

「あゝね」

笑美

「あゝね」

すると4、5分遅れで高地と豊嶋が来て、

高地

「サキ、笑美何ばしよつと？」

サキ

「果林と茜も来とつたと」

高地

「健八の教え子にキヨンって子が居るっさ。その子も川棚の奴さね。健八ね、そいつの妹ば見た事あるらしかとけど、そのときに健八のキヨンくんが『キヨン、オイもわい（お前）のごと家族が欲しかったぞ』って言いよつたらしいけんね」

豊嶋

「健八孤児やつけん、そがんボヤくとも無理無いバイ」

するとそこに永岩庸介という顔が黒子だらけの男が来る。

庸介

「いろんな顔ぶれが揃つとるやつか。みんなこがんとところで何ばしよつと？」

大誌

「花火は見よるっさ」

健八

「にしても何か騒がしくなかや？」

庸介

「そりゃそうやろ。こがん人のいっぱい居るけんが」

健八

「つていつでも変さ」

周りにいた人たちは野次馬のように何かを囲んでいた。

渉

「何のあつたとや？」

と言い一同は野次馬を掻き分けて行く。

ヤンキー同士の喧嘩（といっても一方的なリンチ）だった。

健八

「こりゃひどかね」

大誌

「一体何のあつたとや」

通行人

「何かね、殴られてる方が殴ってる方にちよっかいばかりらしいけんね」

庸介

「あーね。爆発しても無理なかね」

すると殴っている方のチンピラが

「ん？」健八の方に目を向ける。

「おいおっさん、さっきオイたちの話ばしよったね。オイは赤口と言^{えのつら}う。でコイツは江浦、コイツは野島とその他諸々。数年前角川高校の野球部の連中はボコボコにしたとオイたちバイ。」

健八

「何だと！！…てかどっから聞いてた。いや別…お前らに喧嘩売ってるわけじゃなかけん」

と言うとさっきの

「その他諸々」に含まれてた茶髪で身長170cm位で派手な服装の男が出てきて

「さっき野球部襲撃エピソードば話しよったおっさんの前ばたまたま通り掛かったときに聞いて、そいば赤口に言^{えのつら}ったつさ。」

健八

「まさかお前ら。オイば血祭りに…」

赤口

「そのまさかだゝ行けゝ」

と言い健八に襲いかかる。

庸介

「おい逃げようで。コイツらただ者じゃなかごたっけん健八、お前殺されるバイ」

健八

「いや。こがん所で逃げよったっちゃ、男じゃなかぞ。しょうがねえ売られた喧嘩は買うのが筋ってもんやろ」

と言い健八が赤口たちに殴りかかる。

最初は次々と殴り倒して行き、好調だったが、健八は背後から木製バッドで殴ろうとしている1人に気付かず、

「死ねゝガッゝン」

健八

「うわあゝ」

「…ん？ここはどこ？」

健八が目を覚ます。

庸介

「オイん家」

健八

「しかしあの連中何者やる？物凄く強い。川棚の人間でもないみたいやし」

庸介

「どうやらヤツら、とんだ極悪非道人でね、角高の野球部のヤツらはボコボコにした事に関してはただ単に横着かたと甲子園出場の切符ば手にしていい気になつとる所にムカついただけみたいやけど、長崎県内では他にもその前に長崎の海星が被害に遭つとるけんね。最近は可愛い女ば攫ってリーダー格に当たるヤツのアパートに監禁して、いやらしい事したり他にも色々してるらしいバイ」

健八

「最低やつか」

すると庸介のケータイが鳴る。

かけて来たのは刻正太。^{まさた}彼は川棚テレビのカメラマンをしている。

庸介

「もしもし。何や？」

刻

「おい大変だ！豊嶋と高地が変なヤツらに攫われた」

庸介

「何だと！？攫ったのまさかさっき健八はボコボコにした連中じゃ？」

刻

「は？」

庸介

「健八みたいなヤツに絡むっていう例外もあるかもしれないけど、何でも強い野球部ばかりを襲うならず者らしくて、聞いた話によると可愛いと思つた女は攫つたりとかもするらしいけね」

刻

「うわぁ最悪やん。ヤツらの手がかりのなかけんみんな困つとるっさ」

庸介

「絶対許さんよねそいつら」

刻

「うん。じゃあね」

庸介

「アア」

と言い電話を切る。

健八

「誰今の？」

庸介

「刻。高地と豊嶋が赤口率いるさっき健八ばボコしたヤツらに攫われた」

豊嶋と高地は両手を縄で縛られ吊され、麻酔で眠らされていた。

赤口

「この茶髪で化粧がヤバイ方は胸無いけど、若干エロチックで良いし、黒髪でスラッとしとる方は胸あるし。しかし両方共あの健八つて男の何処に惚れたとかな……」

江浦

「大毅（赤口）、オイはこの2人よりもこっちの女の方がいい女っと思うなア。スタイル良いし、いろんなヤツに対して態度デカいつていうのがたまに傷けど。キョンってあがんズンダレた男の何処に惚れたのやら」

江浦が指さす両手を縄で縛られ吊されて麻酔で眠らされている少女は何とハルヒだった。

実は赤口たち、ハルヒも攫っていたのだ。

赤口

「確かに前が気に入るのも無理なかな。噂によるとコイツ、行いとか嗜好が非常識極まりないらしいし、告って来た男ば全部振つとるけんね。OK出しても」

「普通の人間には興味無い」って言うて僅から分で破局さ。でもこがんで見ると可愛いくて魅力的バイ」

キヨン

「何！ハルヒが攫われた！？」

長門

「ええ。犯人は以前角川高校の野球部を潰した事がある集団。リーダー格は赤口大毅という男。ハルヒの他にもそいつらに攫われた女の子は数知れない。いずれも赤口のアパートに連れて行かれて天井から吊してある縄に両手を縛られ麻酔をうたれていやらしい事をされたりとヤツらの思いのまま。以前東京でホームレスの老人を殴り殺して逮捕された事もあるらしいけど未成年という理由で罪には問われず、釈放されている。それを良い事にヤツらの行いは益々凶悪化している」

キヨン

「それにしてもハルヒのどこがいいんだ。そいつら」

古泉

「許せないですね」

みる

「早く涼宮さんを助けに行かないと」

「パタン」

健八が立ち上がる。

庸介

「どうした？」

健八

「もう赤口ってヤツらのよかごとされてたまるか。法で裁けんとやったらオイの手で消してやる（豊嶋、高地今助けに行くけんな）」

古泉

「どうしたんですかキヨン君」

長門

「……」

キヨン

「ハルビ、今助けに行くぞ」

つつく

第五章：噂をすれば影がさす（後書き）

訂正：朝比奈みくるがハルヒの事をハルヒちゃんと呼んでましたが、正しくは涼宮さんのです。

第六章：赤口過激派組織編決着

ここは赤口が部屋を借りているとあるアパート。

麻酔で眠らされていたハルヒが目を覚ます。

ハルヒ

「…え？ちよつと何なのこれ」

赤口

「ん？麻酔が切れたか」

手の自由を奪われた状態のハルヒが足をバタつかせながら

ハルヒ

「あんたたち！？この縄解きなさい」

江浦

「解けつて言われて素直に解くもんか」

すると高地も目を覚ます

高地

「何やこい！あんたたち果林（一人称）と茜とハルヒちゃんばこんとこに監禁して何ばしたかと？」

赤口

「決まっとなっつか。わい（九州？長崎？弁でいうお前）たちはオ

「私たちの奴隷さ」

高地

「奴隷？イヤだ放して。茜は？おい」

と言い両手は自由が奪われているので代わりに足で蹴って豊嶋を起す。

豊嶋

「…ん？ここはどこ？果林…大丈夫？ハルヒちゃんは」

ハルヒ

「私は大丈夫よ。この通り誰か助けを待つしかないわ」

「ドーン」

と玄関の扉が蹴飛ばされたように開いた。

健八

「オイの事ズンダレズンダレって言いよったね。ズンダレはわいたちやつか。赤口たち、お前らほんと卑劣やな。実はオイも角高の野球部の横着さにうんざりしとったっさ。そういったのにうんざりしてる者同士仲良くできると思っとなに…しかも女という弱い立場の人間ば攫ってこがん所に監禁しやがって」

豊嶋

「健八！」

高地

「助けに来てくれたと？」

ハルヒ

「健八先生、早くコイツらやつつけちゃって」

健八

「ハ…ハルヒ、お前迄赤口たちに監禁されとったとや？」

キヨン

「兎にも角にもてめえらとこの過激派軍団と決着つけなきゃな」

健八

「て…キヨン、お前いつの間に。てかハルヒ、王子様が助けに来てくれたぞ」

と言うとキヨンは如何にもやる気なさそうな目をしながら、

キヨン

「ウザイですよ先生。それにしてもあんたも罪な男ですね。豊嶋先生の事好きなのに高地先生の事も好きなんですよ？でもね、好きな人は1人に絞らなきゃダメですよ」

健八

「違う。そういう訳じゃ無い。てかキヨン、お前いつの間に。まさかハルヒも攫われたとや？」

キヨン

「ああ。あんな女を攫うなんて世の中には物好きもいるもんだ全く。」

ヘドが出るわい」

赤口

「おい、お喋りはそこまでバイ。お前ら2人、わざわざオイたちに殺されに来たったい」

健八

「うんにや、オイたちがお前らば殺しに来た」

キヨン

「殺すつつつても本当に殺しはしないけどコテンパンにしててめえらの真っ黒になったバナナみたいに腐った根性を一から叩き直してやるんだよ」

と言うと赤口若干ムカついた印象になり、

赤口

「ナメた事ばかり言いやがって。江浦、野島、アイツらばやってしまえ」

と言いさつきまでおとなしそうにしてた赤口のダチ2人が健八&mp;キヨンに襲いかかるが、健八は飛んでくる江浦の拳を見事にかわし、キヨンも、木製バッドで殴かろうとしていた野島の額を踏み台にして奥の方に両手を繋がれているハルヒの所に、健八も江浦にアッパーを喰らわし同じく奥の方に両手を繋がれている豊嶋と高地の所に行き、縄を解いて救出し健八は豊嶋と高地を両肩で担ぎ、キヨンはハルヒをお姫様だっこして3人を安全な場所に避難させ、赤口たちに戦いを挑む。

赤口

「わいたちによる捕らわれのヒロイン救出劇カッコよかったバイ。さてと完全に殺される準備は出来たみたいやな」

健八

「態度でかかのお前。こがん最低な事する野郎は真のヤンキーじゃなかぞ」

と言いいっぱい握りしめた拳で赤口を殴り、赤口は思いっきり派手に2、3メートルぶっ飛ばされた。

江浦

「赤口」

野島

「大毅さん」

赤口

「てめえやりやがったな……」

と言いい健八に殴りかかる。

「ボコッ」

健八

「ぐはっ」

と言っ。

健八の口から出血していた。

キヨン

「大丈夫か。あんた（健八）意外に喧嘩強いんだな。あんなごろつきと互角に戦ってる。て俺だけ何もしない訳にはいかないし。お前ら」

と言うと

江浦

「オイが相手してやる。所詮雑魚のくせにオイたちに喧嘩売ろうなんて100年早かぞ」

と言いながらキヨンに馬乗りしてボコボコ殴る。

目が紫に腫れあがり口から出血してるキヨンが自分に馬乗りしてる江浦を払いのけ、胸ぐらに掴みかかり殴る。

「ボコッ」

「ボコッ」

喧嘩が更に激しさを増す中、赤口が健八の髪を掴み腹に膝で何発も蹴りを入れる。

健八はそのまま床に倒れ込んでしまっても再び立ち上がり

健八

「お前らみたいに女ば監禁しよるようなヤツは真のヤンキーじゃな

い。真のヤンキーやったらこがん最低な事はせんでただ単に、己の正義ば貫き通せ」

と言いながら回し蹴りを喰らわし若干よろつく赤口が

「フツ」と鼻で苦笑いをし、

「綺麗事ぬかしやがって」

と言う。

その横から心配そうに豊嶋と高地とハルヒが見てる。

豊嶋

「健八もキヨン君ももうやめて！。これ以上やったら死ぬよ」

赤口・江浦・野島と3VS2で戦ってた健八& a m p・キヨンが、

健八

「いや。これでもまだまだ序の口に過ぎん」

キヨン

「ああ俺はこついうのは好きじゃないけどコイツらと決着つけたいんだよね」

ボロボロになりながら喧嘩している健八が豊嶋と高地の目に、キヨンがハルヒの目に映る。

やがて健八、キヨン、赤口、江浦、野島は床に大の字に横たわってた。

キヨン

「ハア…ハア…お前ら3人（赤口・江浦・野島）ほんと強いな」

赤口

「オイたちの負けバイ。自首する。他にも深夜にホームレスとか帰ってる途中のサラリーマンばリンチして金ば奪ったりしよったけん」

健八

「…そーや。ならお前ら立派な犯罪者やな。自首するって事はオイたちとの喧嘩は通じて足ば洗う気になったか」

夜空に浮かぶ三日月が窓から見えた。

第六章：赤口過激派組織編決着（後書き）

健八 & a m p ・キョン、かつこよかったですか？
別無理に答えなくても良いです。

第七章：酒は百薬の長

ここは長崎県長崎市琴海町（元は西彼杵郡琴海町だったが、2006年1月に長崎市に編入合併して消滅）の国道206号線沿いにある琴海パーキング。

「何かどうかで何か大変な事の起きてたのかな…」

ワゴン車の荷台に専用のホットプレートを設置してたこ焼き屋を営んでいる白髪混じりで鰹子唇、痩せ型の男性がたこ焼きを焼きながらの独り言。

彼の名前は土本英則。

波乱万丈な人生を送って来たらしい。

その夜、所変わり

健八たちは高地が前で花火をしていた。

そんな中女性陣が談話（みたいな？）をしていた。

サキ

「果林（高地）も茜（豊嶋）も無事でよかった」

高地

「うん。みんなに心配かけちゃったネ」

豊嶋

「監禁されたときはマジ死ぬかと思ったけんね」

榎本

「健八もキヨンって子も大活躍やったやん」

サキ

「茜は新司（沖平）の事好きけど健八の事も好き、果林は周悟（志野）の事好きけど健八の事も好きとやもん」

榎本

「確かハルヒって子もキヨンって子が好きらしかね。果林も茜もハルヒちゃんも監禁されてるところば惚れてる男に助けられて。正しく王道パターンやん。そいと佳代も健八の事好きとバイ」

サキ

「佳代とあんたたち2人ライバルよ。でもアイツ、こういった恋愛絡みのゴタゴタには興味無かもんな」

豊嶋も高地も若干躊躇している。

高地

「そつだ。今からウチにあがらん？」

健八たちにも

「ウチにあがらん？」遊び人の刻はテンションMAXになる。

「も〜ちろん！！」

すると健八が刻の左肩に手を置き、

「騙されるな。絶対金取る気バイ」

高地

「そがん事考えとらんって」

サキ

「健ちゃんの用心深さは相変わらずやね」

と言う。サキは健八とは幼なじみなので昔を思い出すように言う。

健八

「何だかんだ言ってもオイ、ゲーセンで遊び過ぎて今金無かつさね」

一行は高地宅の居間のテーブルを囲むようにして座っていた。

ビール瓶数本と、酒の肴にあたる枝豆やらつまみやらもある。

豊嶋と高地が健八の両隣に座り、

豊嶋

「今日だけ特別」

健八の手元にあるグラスにビールを酌す。

健八

「…悪いな」

ビールが入ったグラスを口に持って行き、

「ゴクッゴクッ」と飲み干す。

すると今度は高地が、

「果林も酒は酌してあげる」

高地も健八のグラスにビールを酌す。

健八

「（たまにはこういうのもよかも）」

庸介も居たが、この場では全く出番が無かったが、その間何してたのかは読者の想像にお任せする。

ここから説明はキョン視点で述べて行く。

という訳で俺のクラスメートで友人の国木田と不良っぽいのが特徴の谷口と、という訳かハルヒも一緒に、計4人と長崎県佐世保市の国道35号線（一部区間）と並行してある四か町アーケード内にあるジャスコという大型ショッピングセンターの最上階のゲーセンで遊んでた。

俺を含む4人全員格闘ゲームが好きなので設置されてあった拳法アクシヨンのやつで俺はハルヒと対戦していた。

俺はゲーマーだがハルヒの腕には及ばないのが現状であり、ハルヒ

に59連敗もしている。

ハルヒ

「やったまた勝っちゃった。これで59連勝ね」

キヨン

「強いなお前」

横で見ていた谷口が言った。

「キヨンいい加減替われよ」

「ダメだ。コイツに勝つまでは。ハルヒ、もう一回勝負だ」

ハルヒ

「いいわよ。もし次も私が勝ったら60連勝ね」

負けっぱなしじゃ悔しかったので再び対戦をすることとなった。

結果俺はやつと勝った。

ハルヒ

「くやしい」

キヨン

「油断大敵ってやつか。俺がハルヒの連勝記録を追い抜くまであと59連勝しなきゃな」

谷口「勝っただろ。早く替われ」

キヨン

「ヘイヘイ。約束だもんな。でもアイツ（ハルヒ）強いぞ」

ハルヒがバトルゲームが強い事を谷口に警告しながら立ち上がろうとした次の瞬間…

「ボコッ」

俺に殴りかかってきたのは推定50〜60代位の知らないおっさんだった。

キヨン

「おっさん何人違いしてるの。俺に似たヤツに何か恨みがあるんですか？」きつと何か理由があるはずだ。

「うるせーオイのプライベートなんかお前には関係無か」

お前から殴りかかって来てそれはないだろ。俺を2、3発殴り、聞く耳を持たない。

俺もブチギレてその親父に殴りかかろうとするが、

国木田と谷口とハルヒが止めに入り、

国木田

「やめなよキヨン。あの危ないおっさんはシカトしてどっか行こうよ」

谷口

「ああ手を出した方が負けぞ」

ハルヒ

「学校にバレたら謹慎になっちゃうわよ。昨日も私を助ける為に殴り合いの喧嘩してるんだから」

キヨン

「確かに…でもこの親父は、鉄槌を下さないといけないいかれポンチなんだよ」

谷口と国木田とハルヒを振り払い、おっさんに殴りかかる。

当然向こうも殴り返して来る。

気付いたら喧嘩になってた。

俺この長編ではよく喧嘩するなあ。ほんとこんなキャラじゃないのに。

するとそこに店員が仲裁に入り、

「何やってんですかあなたたちは」

キヨン

「この親父がいきなり攻撃して来たんですよ」

店員は俺の顔を観察し出す。

「君、ここの常連だよな…困るんだよねこんな所でこういう事されちゃあ。決めた…君はもうここのゲームセンター出入り禁止」

俺は締め出された。

俺はゲーセンの前の柱に背中をくっつけて座り

「ふざけるな。何で俺は悪くないのに…」

そこにハルヒ・谷口・国木田が俺について来るようにしてやって来る。

ハルヒ

「キョンが手を出したりしなきゃこんな事にはならなかったんだから」

谷口

「まあいいじゃねえかゲーセンはここだけじゃないんだし」

確かにそうだ。

四か町アーケードを歩いていた俺たちだが、

ハルヒ

「私の行きつけの居酒屋があるんだけど今からそこ行くわよ」

つておい、お前まだ未成年だろ！何酒飲む所の常連になってんだ！もしこれが学校にバレてみる！謹慎になるぞ！勿論俺たち3人は反対したが、ご存知のヤツもいると思うが、向こうの方が強い立場なので当然、

「何か文句ある？」

「いや…何も」

睨み付けながらガツンとした口調で言うのでそう言うしか無い。

谷口

「じゃ俺たち帰るわ」

国木田

「キヨンはどうする？」

キヨン「俺も帰る」

飲酒したのが学校にバレて謹慎になるのはごめん被るのに、俺だけ強制ってふざけるな。

「谷口と国木田の2人は帰るなら帰って良いけどキヨンは強制よ」

おい！それどういう事だよ！

谷口

「じゃキヨン、涼宮さんと2人きりで楽しんで来い。じゃあな」

その場を退去した谷口に続いて、国木田も

「じゃあな。谷口待てよ」

と言い帰って行った。

で、俺はハルヒと、行きつけだという居酒屋で飲んでた。どこにでもあるようなごく普通の店だった。

俺たちは焼酎と枝豆やらレバニラやらを頼んでた。

俺は枝豆を食べ、焼酎を専用のコップ？器？に注ごうとしたとき

ハルヒ

「あつ、いいのよ酌してあげる。いつもキヨンには苦労かけてるし、それと…あの…その…助けてくれてありがとう…ここに連れて来たのはその礼で…」

と言い、俺の手元にあるコップに焼酎を酌す。しかも若干俺を見て恥ずかしそうにしながら顔を赤らめていた。ハルヒみたいな気が強いヤツには考えられない光景だった。もしかしてコイツ…

キヨン

「長門とか朝比奈さんとか古泉は呼ばなくていいのか？」

ハルヒ

「いいのよ。今日はあんたと2人で飲みたい気分だから」

何故かハルヒは顔を赤らめ俺に焼酎を酌す。どんな風の吹き回しだ

キヨン

「悪いな。今度は俺が注いでやるから」

俺ばかり酌してばかり悪いと思い俺もハルヒに酌した。

が、これがハルヒが暴走する火種になろうとは…

「はぁー美味しい！もう一杯！」

俺は再びハルヒに焼酎を酌した。

「もう一杯！」

＊＊そして1時間後＊

ハルヒはずっと飲んでいたのでかなり酔っている。

キヨン

「って何杯飲む気だ。それぐらいにしとらどうだ」

ハルヒ

「いやまだいける」

自分で焼酎を注ごうとして『バタツ』とテーブルに倒れ込み、

「何なの全く。この小説平凡過ぎるじゃないなのよ。登場人物も普通のヤツばかりだし体育祭とか文化祭は全然つまんない。角高は馬鹿高だけあって『涼宮ハルヒの憂鬱』本編に出てくる北高と比較すると遥に酷いわ。末林がどこ中って訊かれてキレてC組とF組を占拠したりとか佐藤と大元寺がいじり合ってるところとかはつきり言ってるでもいい。豊嶋と高地と私が監禁されて、助けに来た健八とあんた（キヨン）が私たちを攫った連中と対峙するっていうかっこいい一面もあったけど。とにかくグダグダ過ぎるわ」

一旦愚痴を言い終えたところでまたコップに酒を注いで、一気に飲み干す。

それからハルヒはフラつきながら色んな愚痴を長々と話し続けた。

言われて見れば実業は全くもってつまらない。青春もクソもない。店を出た後、ハルヒは散々飲んでたので歩くのもままならない状態だった。俺が支えながら途中まで送って行く事にした。

「…吐きそう…」

道端にうずくまるようにして吐こうとするハルヒ。

「おい！ここで吐くなよ！どうしてもって言うとなったらどこか人目のつかないところに行こうか」ヒック

ハルヒは物凄く具合悪そうにしてたので路地裏に行った。

俺もハルヒほどではないが相当飲んだ為、しゃっくりを連発していた。

「ウゲツオエエ〜」オロエエー

半端じゃないくらいの量だった。ハルヒが吐いたいろんな食べ物や胃液が混合して出来た形が無い物質がそこら一面を埋め尽くしていた。

「だから言わんこっちゃない」

俺はハルヒの背中をさすりながら呆れながら言った。

可愛い見た目とは裏腹に態度がデカく、根性剥き出しで行いが大胆過ぎるが、まさか酒癖まで悪いとは困った物だ。

俺も酔っぱらってた上にもう遅かったので、家に帰ってすぐに寝た。

翌朝、起きたとき二日酔いでこの世の物とは思えない位頭が痛かった。

「いてて…ガンガン来る、吐きそう」

猛烈な吐き気にも襲われ、洗面所に行き、流しに思いっきり吐いたのだった。

一方その頃、

「頭いてえ、二日酔いだあ。タベ相当飲んだけんねえ」

布団から起き上がり、激しい頭痛に伴い頭と額にかけて手で押さえる健八であった。

第八章：啓文と鉄橋

啓文は2・Dに居る友達と購買部に買ったしょうが焼き弁当を食べていた。

啓文のある友達が自分と同じく購買部のしょうが焼き弁当のメインの肉を宙に投げ、それを口でキャッチして食べていた。それも1切れずつではなく4、5切れ一遍にだ。

「すげえかつこいい」

こつという超人技に憧れた啓文は、それを真似をした。

肉を一気に5、6切れ宙に投げ、口でキャッチしようとして、

啓文

「うわっ」

誤って肉が顔の目と鼻の間に落ち、転がって行き、そのまま口に入れば良いものの、カッターシャツとズボンを経由して床に落ちてしまった。

啓文

「服は汚れたやん。肉ば床に落とすしマジ最悪」

タレを多く含んでいたのでカッターシャツもズボンも思いつきり汚れたのである。

啓文は食後、友人2人の付き添いで汚れたカッターシャツとズボンを水道に洗いに行く。

啓文

「オイ今日昼、購買部で買ったしょうが焼き弁当の肉ば宙に投げて
そいば口でキャッチして食おうとしたらこのザマやつけんね」ベラ
ベラ

内村（啓文の友人）

「バカやん啓文」

？

「自分のせいやつか」

タレっばいシミが所々に残っているが、洗って殆ど落ちた。

啓文は洗ったカットシャツとズボンを担ぐように持って教室に戻り、体操服を着用して、丁度すぐそこに鶏川がいたので

啓文

「おい鶏川、こればあそこの窓に干して来い」

と鶏川にカットシャツとズボンを干させようとする。所謂パシリである。

しかし鶏川は逃げるようにして教室を出てどこかに行ってしまう。

仕方がないので啓文は同じくすぐそこで瑠や憲五郎と喋っていた鉄橋に

「鉄橋、これば窓に干して来い」

と洗い立てで若干水を含んでる制服の上下セットを鉄橋に差し出そうとするが、

鉄橋

「嫌だ。何でそがん事せんばとや」チッ

機嫌悪そつに舌打ちしそつぽを向く。

すると啓文が激昂し、

「何やお前…くらすぞ！」

と怒鳴る。

ハルヒやキョン、古泉を含む2・Bの連中全員がこの2人のやり取りに注目していた。

鉄橋は啓文を睨み付けるようにし、

「ギヤーギヤー煩い」カリカリ

啓文

「何だとコラ…」

本来ならば啓文はその場で鉄橋を血祭りにあげる所だが、以前にも何回か喧嘩してボコボコにしているのでまたこのような事をしたら謹慎になるのでここはグツと我慢した。

ハルヒ

「山口、カッターシャツとズボンぐらい自分で干して来なさいよ。何逆ギレしてんのよ」

啓文はハルヒに逆らえないというのを良いことに啓文にガミガミ責めるハルヒ。

教室を後にし、何をしに行ったのかと思いきや、普通科のA組から古泉を連れてくる。

「古泉、あんたからも山口に何か注意してやって」

ハルヒは啓文を指差しながら古泉に促す。

事情はさっき既に話してたようだ。

古泉

「山口くん、他人をパシろうとしたくせに逆ギレはよくないですよ。本来ならばここで鉄橋くんをボコボコにしてる筈のあなたが全く手を出さなかった事は褒めますけど」

ボコされるっていうのを恐れる事なく啓文を堂々と注意する。

啓文がブチギレて古泉をボコボコにしようと思っていたが、啓文は何もしなかった。

弁当をこぼしたのは自分のせいなのに、

洗った制服の上下セットを他人に干させようとパシろうとしてイヤって断られてからと言ってキレるなんてちょっと自己中過ぎるぞ啓文。

でもこれを本人に言ったら拳が物凄い勢いで飛んで来るのは言うまでもなかったので敢えて何も言わなかった。5限に英語の授業で来ていた豊嶋英語教師にも啓文はあの話を聞かせていた。

啓文「ちよつと聞いてよ先生、オイ今日昼しょうが焼き弁当は食いよつたっさ…」ガヤガヤベラベラ

豊嶋「…だけん体操服姿ネ」啓文のくだらない失敗談を聞いて呆れながら言う。

啓文「…」

豊嶋「長話はこれぐらいにして、英検の問題集ば出して」

* 帰りのHR *

啓文の勢いはまだまだ治まらない。

教卓に立って何考えてるかわからない目つきの俺たち2 - B担任・健八国語教師が

一番前の机だった啓文の体操服姿に気付き

「啓文、お前何で体操服や？」
と訊く。

「そいがですね先生聞いて下さいよ。オイ今日昼しょうが焼き弁当は食いよつたんですよ…」ベラベラ

と、しょうが焼き弁当の肉を制服にこぼしたエピソードをいろんなヤツに聞かせている啓文であった。

第八章：啓文と鉄橋（後書き）

くらすぞは長崎弁で、殴るぞを意味します。

第九章：大元寺が何も考え事が出来なくなった経緯

大元寺右耶は中2のとき、セイジというヤツに物凄くキレていた。

彼の母校・長崎県佐世保市にある早岐中は荒れていた。

「セイジマジ調子乗っとる」

とてもじゃないくらいイライラしている。

このときの彼は頭に血が登ってるみたいである。

ある日大元寺はぼつかばか亭（現ホットマト）に弁当を買に行った。

そのときも大元寺はセイジをどのようにして陥れるか考え込んでいた。

「（セイジばどがんやって陥れるか。バナナの皮で転ばせるか…でもそがん昭和のギャグ漫画アニメみたいに簡単に引っ掛かる訳無いしな…やっぱりそこは居眠りしてるを狙って顔に死ねって書くか…」

と心の中で呟きながら間違えてはっこはこ亭のすぐ近くにある早岐警察署に入って行き、弁当屋と勘違いし受付に、

「のり弁2つください」

と言つと受付の女性は勿論、

「…」

と口をポカンと開け石化されたように固まっていた。

大元寺「あの、おゝいどうしたんですか…」

と受付の女性の様子を伺ってから周りを見渡してやつと自分が弁当屋のレジと間違つて警察署の受付にのり弁を注文してしまったと気付き、するとそこに幹部格と思われる如何にも偉そうに振る舞つてゐる男性が大元寺の所に来て、

「君、これは何の悪戯かネ？」

と訊く。

しやれにならないくらいの赤っ恥をかいだ大元寺は

「いえ！違います違います！俺これはただの事故なんです。本当ですって！」

すると男性は

「とにかく来てもらおう」

と言ひ大元寺の手首を掴み、連行して行く。

大元寺「ええちょっとどこに連れて行くんですかあ」

「取り調べ室」

と冷静に答える。

大元寺「ふざくんなチキショー」

と納得出来ないのも無理は無い。

それから数時間も取り調べされたのだった。

それ以来大元寺はなににも考え事が出来なくなった。

寝るか喋るかどっちであり、休日はゲーセン、家に居るときはゲームばかりしているというのは元からで、

角高のスクバで帰りは彼がほぼ占拠している。

誰も喋る相手が居ないときはボくっとして黙ってるが、同じく早岐の近くの大塔新田在住で小柄で額が広い渡辺海豪や有福の髭が濃い以外至って普通の澤村鉄也が居ると非常に煩い。

大塔新田には角高のスクールバスが4つも通過する。東彼線・西彼線・早岐線・有田線がある。

彼が1年のときは東彼線だったが今は西彼線に変更になっている。

大元寺がスクールバスの中で喋ってた主な内容は…

「オイね、大ジャスの3階のゲーセン行っ たっさ。頭文字Gばした

っさ…」

「コカ・コーラのコカはね…」

「ワンダーツのチョッパーの聲が一時期変わってったやん。そんなときのワンダーツの平均視聴率の11・9%（↑本当はもっと良好だが）にまで落ちたっさ」

などなど。

あ、あと1つ忘れてた

「オイね、中3のとき一度も女子と喋った事無いけんね」

などがある。

そんなある日同じく大塔新田在住でハルヒたちや2・Bの生徒の一年先輩でクラスは朝比奈さんと同じく3・Bで小柄でポツチャリした印象の藤谷愛弓が大元寺に

「あんた大元寺やる？大塔新田よね？」

「アアそうだけど」

これが大元寺と藤谷の最初に交わした会話であり、それ以来大元寺は藤谷に対しても煩くなるのであった。スクバを降りた後大元寺は

藤谷と2人で並んで喋りながら帰るようになり一部では交際疑惑が浮上した程。

一方ハルヒはSOS団の部長席で脚と腕を組み

「…今回は私たち全然出番なかったわね」

「大元寺の話一色だったな」

と俺は古泉と暮をしながら言う朝比奈さんが

「確か私のクラスに居る藤谷って子がその大元寺ってヤツの話を色々してました何か…」

（回想

藤谷「朝は眠くてテンション低いみたいけど帰りのスクバではマジうざい。もうアイツバスば占拠しとるもん。バスば降りた後ウチにベラベラ喋りかけて来るけんね」

）

って言うてました」ハルヒ「そう。アイツ（大元寺）が自由人っていうのは知ってたけどまさかそこまでとはねえ」と言う。

そんな中長門は相変わらず微動だにせず読書に夢中である。

第九章：大元寺が何も考え事が出来なくなった経緯（後書き）

健八「実は作者が新しかケータイは買ったっさ、作者認証を元からあったケータイから新しいケータイに移植出来んで、次の話を以てに健八・ハルヒの第一期は終了して、第二期を松野ヒデキ名義で「新・2年B組健八先生VS涼宮ハルヒ」としてリニューアルするらしいけんネ」フワア

と言つて欠伸する。

ハルヒ「先生！何でタイトルに先生の名前だけじゃなくて私の名前も冠してあるの？」とイスから立ち挙手しながら健八に訊くと

健八「ああ、そいは…元はこれ”健八先生”やったとけど作者の…ハルヒが原作のファンフィクションやからにタイトルば”健八先生VS涼宮ハルヒ”にした方が読むヤツが増えるかなあつて思つたらしかバイ」

ハルヒ「なるほど」

健八「てか、何でお前以外全員来とらんとや？」

ハルヒ「さあ」

2 - Bの教室に居た健八とハルヒだけだった。

健八「ハルヒ、生徒が1人だけじゃ授業にならんけんが悪かばつてんもつ帰れ。この教室施錠するけん早く出る」

と言うと

ハルヒ「…わかった」

と返事し、

健八は鍵を振り回しながら、ハルヒは通学バッグを持ち教室を後にする。

というわけで健八先生VS涼宮ハルヒ第一期、後一話で一旦終了、第二期もよろしく。

第十章：喧嘩両成敗

帰りのHR

いつものように学級委員が号令をかけて終わる。

筈だった。

俺のクラスの副担任であり、商業教師の田邊はひねくれた性格が災いしてか、生徒に嫌われてる模様。

啓文が田邊に色々言われブチギレ、

「うっさかつさ！調子乗んなよこのくそアマ！」

と怒鳴り、田邊商業教師も負けずに

「は？何ネ今の口の聞き方は」

と言うと啓文も

「うっさかけんがうっさかって言っただつさ！雑魚がつ」

と言い教室を後にする。

すると教卓のイスに腰を掛け、後ろに反っている頭を支えるようにして両手を後頭部に添えている健八国語教師が

「田邊先生、相当嫌われてるみたいですね」

田邊「ウチ別何もしてないですよ」

健八「困ったもんだ全く」

この2人のうんざりした上での会話のやり取りはあと5分程続いた。

＊＊

機械科の2・Dの肥満体型の長原翔平は啓文に

「啓文、お前なあ体育祭の後片付けのとき、何もせずに遊びよったやろ。オイが『テントの脚運ぶと手伝って』って言っても『は？何でせんばと？嫌やし。長原体デカかけん1人で持てるやろうが』って言い捨てて行きやがって」

上記の他にも体育祭の事で色々ダメ出しされ、啓文はさつき田邊と喧嘩したばかりなので機嫌が悪くブチギレ、長原の首を掴んで壁に押さえつけ、1発殴り、その反動で長原が床に転び、そこに啓文が馬乗りしてボコボコ殴る。

周りには野次馬が群がっていた。

その中には3・Bの緑髪のロングヘアの少女・鶴屋さんが居て、何と彼女は啓文が長原をボコボコにしてる所をケータイのムービーで撮影していた。

鶴屋さん「ほら長原、あんたやられてばかりいないで山口に殴り返したらどうなの」

鶴屋さん「ほら長原、あんたやられてばかりいないで山口に殴り返したらどうなの」

と言うと、長原は若干滑舌が悪い口調で

「そがん事…言われても…コイツ…半端ない位強かとぞ」

と言うと長原を殴っていた啓文が鶴屋さんの方を向き、

「何ば撮りよつとやわいは！見せ物じゃなかぞ！」
と怒鳴る。

鶴屋さん「…」

キレると恐い啓文に思いつきりガツンと言われてビビり気味である。

国木田「ほら鶴屋さん、だからよせって言ったのに」

鶴屋さん「いや、全然ビビってないよ」

と言いどこかへ行く。

*

ここは図書室。

ブラックジャックや三国志、ロッキーズROCKIESなどのいろんな漫画本

が並べてある本棚があり、佳代子はROOKIESの5巻を読もうと、本棚から取り出そうとしたとき、別の手がそれを拒むようにして掴んで来る。

「放せさ。ウチが先やったバイ」

手の主は田邊だった。

啓文と喧嘩したばかりである為か、不機嫌気味だ。

佳代子「は？何や！新任のくせに生意気かさ。あんたがその手どける。にしても田邊先生、胸まな板のごとしてますね」

言われっ放しじゃ胸くそ悪いと思った田邊も負けずに

田邊「何だと。木山先生こそ美人でスタイル良いよかけんって言うても性格悪いんじゃない男にはモテンとバイ」

漫画本を引っ張り合いながら

「いや田邊先生よりマシバイ。あんた生徒から嫌われとるバイ。あんたの前ではペコペコしよるけど陰で悪口言ってるんですよ。出会い系サイトも利用しよるくせに」

「何で知つとつとや？」

「みんな言いよるバイ。もしこれば教育委員会にばらしたら田邊先生即クビバイ」

「そいは誤解ですよ。木山先生こそEXILEのTAKAHIROの事しか頭にないくせに」

「悪か？何でTAKAHIROのカッコよさに気づかんのかなあ」

「わからんでよかつさ！」

すると2・E担任で体育教師で陸上部顧問、恐い見た目とは裏腹に面白い言動が特徴の堤龍徳が、借りてた本を返しに来る。その本を受付（みたいな所）に渡して、ROOKIESの単行本の取り合いから始まった口喧嘩をして騒いでいる田邊と佳代子に

「コラー！！やかましかぞお前らあ！よか歳こいて大人気なかぞ！周りの迷惑しとるやつかなこてえ」

と喝。

2人はビククリしてしばらく魂が抜けたようにその場に固まっていた。

もし男子生徒ならば堤は何発も後ろの脚や尻に蹴りを入れた上に平手でど突いてただろう。

*

暇だ。SOS団のホームページの更新もしたばかりだし、オセロも飽きたし、俺は読書に夢中になっている長門を背景に背伸びをした。

ハルヒ「……」

団長の机に座りぼーっとして、なぜか俺の方を見て、

「（もしかして私…キヨンのこと…）」

キヨン「何ぼくっとしてんだ？お前らしくねえぞ」

ハルヒ「うわあちょっと考え事してただけよ」

そうにはみえなかったけどな。丁度長門も読書を終え、パタンと本を閉じる音がしたので、俺はそれを合図に帰るようになっている。

キヨン「そうか。俺はもう帰るか」

通学バッグ持って部室から退去するキヨン。

＊＊

「…」

職員室の自分の席に座り、ぼくっとしている佳代子。

妄想（、

健八と2人で星を観察していて、

佳代子「きれい」

と言うと健八が、

「君の方が綺麗だよ」

佳代子「…えっ

）って佳代何ば考えよつと」

「どがんしたと?」

と高地が言う。

「いや何でもないッ。気にせんで」

そこに出席簿を脇に挟むようにして持った健八が来て、

「2・Bの啓文がF組の長原ばボコボコにしてな、謹慎になるかもしれん」

高地「…ウソ…アイツまた暴力沙汰起こしたと?」

健八「長原が運動会の事で啓文に色々文句ふっかけたのが原因らしい」

佳代子「やるねえ長原も。あがん実業…間違えた角高一強いヤンキ―に頭ごなしに文句ふっかけるけんがたい」

健八が出席簿を机に置き、

「確かに長原にも落ち度があつたかもしれん」

テンションが下がったやり取りをしていた。

＊＊

（キョン視点）俺は校舎と校門の石畳を歩いてると、グラウンドで陸上部が練習しているのが見えたので、

「遅くまでご苦労さん」

独り言言っていたら、いずれも陸上部の顧問の田邊教師が堤教師にペコペコしているのを見掛ける。

俺は堤には反抗出来ないくせして俺たちには態度がでかい田邊を見えなくなるまでまるで我が子を殺害した誘拐犯を見る親の如く睨み付けてた。

その後も健八やキョンの周りではいろんなくたなくて面白いドタバタが繰り広げられたのであった。

佐藤教師は大元寺いじりが好きだし、鶏川はやられ役、ハルヒは朝比奈さんをおもちやにする、木山教師はタカヒロ（EXILE）タカヒロ嫌い、末林は休み時間中ニヤニヤしながらウロウロするし、桜下は授業中も常時オチがない話ばかりする、長門は無表情で読書している、

第十章：喧嘩両成敗（後書き）

次回から松野ヒデキ（作者認証上別人扱い）名義で「新・健八先生 VS 涼宮ハルヒ」となります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8765h/>

2年B組健八先生VS涼宮ハルヒ

2010年10月10日20時07分発行